

震災後の無政府主義運動

古川 時雄

●ロシア革命と日本社會運動

ロシアの革命は日本の労働運動、社會運動に決定的な方向を執らしめるに至つた。

初め、日本の無政府主義者はロシア革命に對する批評を可成りさし控へてゐた。と云ふよりも、世界の無政府主義者は^{革命}の當初は自ら進んでボルシエヰキと協同戦線に立つた。特にロシアの無政府主義者はさうであつた。しかしロシア^{革命}の真相が段々に知られて來て、勞農政府即ち労働者の政府が少數共產黨の獨裁であり、ボルシエヰキそれ自らが^{革命}の進行を妨げる最も有力な反革命的要素であることを知るに至つて、無政府主義者はボルシエヰキ排撃の態度に出るやうになつた。大正十年一日に復活した週刊『労働運動』に伊井敬高津正道を加へた事も、ボルシ

震災後の無政府主義運動 (古川)

エヰキとの協同戦線の可能を信じて居たからでの事であつた。が、大杉が『日本脱出記』にも書いて居る様に陰險な彼等のために物の見事に背負ひ投げを食はされたのである。此後、所謂アナとボルとの分裂になつて來る。

『労働運動』紙上にバクニン、クロボトキン、ゴルドマン等の思想を紹介し、無政府主義の立場から、ボルシエヰキがツァールの権力を倒しそれに代ふるに彼等自身の権力を以て労働階級に臨むものであることを、事實を示して之を曝露した。そして無政府主義者は『ゴマのハイ』の共產黨を排撃して、労働階級の解放は労働者自身の自主的行動によつてのみ成されることを力強く繰返した。

●労働組合總聯合の決裂

労働組合の全國的總聯合の機運は熟した。大杉はこれに

就いて、

「最近日本の労働者の間に起つてゐる協同戦線の計畫、即ち労働組合全國總聯合の計畫は、此の必要は飽くまでも労働者自身の必要として進めて行かねばならない。其の必要から生じた労働者自身の計畫として行かねばならない。」

と云ひ、また猶ほ、彼は「この總聯合が共產黨の黨利の上からの利用であつたり、指導者の必要の上からの利用であつてはならない。日本の本當の自覺した労働者は斯の様な協同戦線論を拒絶すべきである」と労働者に警告した。

——大正十一年九月『労働運動』

組合内部にあつても、「今までの小感情を捨て、譲歩すべき所を譲歩し成可く聯合成立に努めること」を申合せたのであつたが、「各組合から代表者を出して共通の問題を協議し解決して行かうとする」自由聯合派に對して、聯合を中央集權的に組織し、少數幹部に權力を握らさうとする合同論を固持するものがあつて、この二つの相反する傾向は遂に分裂を見るに至つた。(大正十一年九月三十日、大阪公會堂に於て、五十七團體二萬七千四百八十人を代表する聯合創立協議會)

「大衆を動かす」ことである。然し、大衆の意志を遙かに隔つて居つては指導出來ない。で、現實の要求の上に「大衆の中へ」臨まねばならぬ。

彼等の現實化の傾向は、震災直前(大正十二年八月二十五日)の労働總同盟中央委員會で「労働者獨自の立場より、労働立法に對して積極的態度を採ること」を決議した。この傾向は震災によつて益々深くなつた。山本地震内閣が普選實施をにほはすや、更に「今や普選實施も近き將來にあつて、労働階級が經濟闘争の外に政治闘争の機會をも與へられんとするを以て、我等が労働階級解放のために、此の新らしき戦線をも利用すべきは勿論なり」とて、之に迎合した。かうして、右翼労働團體及び共產黨によつて指導されるものは益々現實化し、無産政黨樹立の實際運動に着手するに至つた。此の迎合主義は「資本家と政府が協同して労働階級を懷柔せんとするマヤカシ機關である」國際労働會議に代表を派遣すべく、或は自ら代表となるために、組合員の數的擴大を計るに至つたことを見ても解かる。

●『方向轉換論』と無政府主義運動

彼等の云ふ精銳少數分子は無産階級の前衛であらうか。

震災後の無政府主義運動 (古川)

中央集權か自由聯合か、強權か自由かの問題は、既に第一インクナショナル當時からの論争であつて、この無政府主義と共產主義とが相反するものであることは各々自ら異つた行動を決定した。日本の労働運動及び社會主義運動は、「如何にして革命をやつてはならないか」と云ふロシア革命の貴い犠牲と經驗に訓へられて、強權論者に對して勇敢に闘つた。

●『無産階級運動の方向轉換』

然るにこの總聯合の分裂と前後してボルシェヴィキの指導者は「無産階級運動の方向轉換」を提唱した。(大正十一年八月「前衛」山川均) 彼等は云ふ。前衛たる少數者は徹底し純化した思想を携へて、大衆の中に引き返さねばならぬ、と。大衆化、現實化、政治運動化である。

彼等の云ふ少數精銳分子とは彼等共產黨自らであり、一般無産大衆を指導すべき前衛分子であると自稱する。「第二步に於ては、吾々はこの目標に向つて、この前衛が無産階級の大衆を動かすこと」である。卒直に云ふならば「プロレタリアがブルジョアの手から×××××することである。換言すれば、プロレタリアの國家を建設する一ためにのみ

當時『共產黨の過誤——方向轉換論に就いて』十二年三月労働運動に於て岩佐作太郎は云ふ。

「彼等は實に無産階級解放の××運動の前衛ではなくして、資本主義治下の單なる政黨たることを暴露したのである。彼等が今日までの運動が誤つて居ることを悟つて、『廻れ右をして出直ほすのだ』と資本家階級に理解され、賛成されたも無理でなう」

と。また『共產黨の偽瞞——再び方向轉換論に就いて』では、(労働運動十二年七月)

「彼等は無産階級を率ひたいのだ。今日のまゝでは彼等の支配慾、權力慾を満足することは到底不可能と見たからなのだ。

其處で山川君の『方向轉換論』となつたのだ。其方向を轉じて、民衆中に歸るのでなく、民衆に近づきたいのだ。彼等は實に、無産階級の前衛となるのではなくして、其の支配者、指導者たらんとするにあるのだ。」

此の様に評された彼等の方向轉換論が如何なるものであつたかは、此後彼等に導ひられてゐた労働組合がその數的勢力の擴大に全精力を盡すに至つたのを見れば、その眞意

を知ることが出来やう。このためには「しなければならぬ事」までも、或る程度に制限しなければならぬとまで廣言してはゝからなかつた。關東車輛工組合が東京錦糸堀汽車會社に對して労働争議を起した時、總同盟、南葛労働組合はこれをスカップした。彼等は此の罷業を惨敗させ、自由聯合主義を信ずるこの關東車輛工組合を分裂させ、そして自己の組合に吸収しようとの野望の下に憎むべき罷業破りを行つたのである。彼等は組合帝國主義の正體を暴はし、眞剣なる労働争議をスカップしてなほ恥としなかつた。

無政府主義者、アナルコ・サンデカリストは、この争議を應援してボルシェヴィキを排撃した。『労働運動』（十二年七月）はこの争議に當つて、全國の労働者に訴へて「我等の城塞を守れ」と叫んだ。また『自由人社』は「關東車輛工組合同盟罷工批判號」を發して、組合攪亂者を排撃すべきことを主張した。ボルシェヴィキは彼等の方向轉換論に従つてこの争議を裏切つたのである。無政府主義者は常に、共產主義者が、日本の大衆運動に於ける友愛會（後の總同盟）の指導權と共に、彼等自身の指導權を獲得しようとする野心を労働階級の前に暴露して、中央集權論

の虚妄を徹底的に否認し、排撃した。

●大正十二年震災と無政府主義者

無産階級運動の方向轉換がボルシェヴィキによつて提唱されてからは労働運動、社會運動は『現實化』し、右傾化して行くかのやうに見られる。此の時、獨乙に開かれる筈であつた國際無政府主義大會に出席すべく日本を脱出してゐた大杉榮は、パリのメーデーで捕はれて七月に歸つて來た。

大杉はこの旅行中特にネストル・マフノの運動に心を動かされ「ロシア革命」が僕等に與へる事の出来る、一番大きな教訓を齎らすもの」だと考へた。そして異常な感激を以てこの運動を紹介した。『無政府主義將軍』がそれである。後、また石川三四郎は「黒色旗を押し樹てたるネストル・マフノの農民運動は、二十世紀に於ける労働運動、社會運動の前衛軍たる役目を勤めたものである」と紹介した。労働運動昭和二年二月—八月）この農民の創造的運動の暗示を受けて日本の無政府主義運動は、更に着實な運動に入らうとするとき、かの十二年九月一日の地震が勃發した。

突如として起つた大震は度々ぶり返し、猛火は猶ほ勢を逞しくしてゐた二日、『流言蜚語』が何れからかはなたれ

。大杉榮、伊藤野枝は九月十六日、橘宗一少年と共に東京憲兵隊司令部で

「同志諸君！我等の戦友は倒れた。されど我等は不斷の戦ひに従つてゐる。我等は數段の勇を鼓して進まねばならぬ。倒れたる戦友の屍を踏み越えて突き進まねばならぬ。一層の覺悟と決心とを以て。

同志諸君！我等が戦友の屍を焼く煙はあがつてゐる。勇敢不屈なりし同志の屍を焼く煙はあがつてゐる。されど同志よ。この貴き死灰の下より、及び彼が如き多くの人々の死灰の下より、我等の自由の大樹は生ひ出づるであらう。」

これは、大杉、伊藤を失つた直後、労働運動社が四度目の復活號を出した言葉である。同人は和田久太郎、水沼辰夫、和田榮太郎、村木源次郎、山鹿泰治、近藤憲二。第二

號（十三年三月一日）は大杉榮、伊藤野枝の追悼號であつたが直ちに發賣撤布を禁止された。

●朴烈事件、及び植民地の運動

震災のどさくさに紛れて行はれた所謂朝鮮人騒ぎは餘りにも×××ものであつた。そしてこれは、朴烈事件によつて清算されたかの觀を民衆の間に起させた。

朝鮮民族は歴史が物語つてゐるやうに、植民地としての二重の壓迫の下に苦しんで來た。歐洲大戰後の民族自決の思想は大正八年の『萬歲騷擾』の獨立運動となつた。またロシアは上海に第三インターナショナルの極東宣傳部を置き朝鮮のボルシェヴィキ化を計つた。然し、朝鮮民族の歴史と實狀を知る者の、何人も否定出来ないことはこの強壓の下に無政府主義的思想が胚まれてゐる事である。大正十一年に東京に『黒濤社』が組織されてからこの運動が表面的に知られるに至つた。後にこの黒濤社が解散して『黒友會』が出來た。朴烈等は『不退社』を起し『不退鮮人』を出したが、この題號を不穩當と見做されて『太い鮮人』と改題し、更に數人の内地人を加へて『現社會』を發行して活動してゐたが、震災に際して捕はれた。

最初、彼等は治安警察法違反（秘密結社）として起訴されたのであつたが、十四年七月に至つて次の數人は免訴になつて出獄した。洪鎮裕、崔圭悺、陸洪均、徐東星、鄭泰成、小川武、張讚壽、韓睨相、徐相庚、河世明、野口品二、栗原一男。しかし、彼等と共に捕はれた新山初代は未決のうちに獄中で斃れた。金重漢は爆發物取締罰則として三年の禁錮。朴烈、金子文子是不敬罪として死刑を宣告されたが、勅令によつて無期懲役となつた。然し金子文子は、大正十五年七月二十三日早朝、栃木刑務所で縊死した。

この事件で免訴になつて朝鮮に歸つた洪鎮裕等は『黑旗聯盟』を組織しようとしたが、直ちに捕はれて各一年以上の懲役に處せられ、十五年七月には大邱事件が起り、方漢相、申宰模、馬明等と、内地より送られた栗原一男、棕本運雄、金正根は今猶ほ獄中に在る。（金正根は昭和二年八月獄中に斃る）布施辯護士が『労働運動』昭和二年八月號に發表したやうにこの眞友聯盟事件が

、棕本、栗原、金正根は只「無政府主義を抱懷するもの」であるとの理由で検事は十年の懲役を宣したのである。

これと同じやうな事件が台灣にも起つて『台灣黑色青年

聯盟』が治安維持法によつて起訴されてゐる。黑色青年聯盟は斯の如き官憲によつて 事件に對して、昭和二年六月二十三日及び七月四日に朝鮮總督府東京出張所並に司法省に抗議書を突きつけ、同事件の關係者の即時釋放を要求した。

●大杉の復讐運動、ギロチン社事件

大杉等を し憲兵大尉甘粕は懲役十年、森は三年、鴨志田等は無罪の判決を受けた。しかし、何れも『國土』の待遇を受けて僅かの期間を形式的に過したのみで假出獄をした。

震災當年十二月十六日、東京谷中の齋場で、大杉榮、伊藤野枝、橘宗一少年の葬儀が行はれた。自由聯合派の労働組合と無政府主義的思想團體とが主催であつた。此の朝、反動團體大化會の下島繁造等は葬儀妨害のためにピストルを亂射して遺骨を奪つた。葬儀場には遺骨が無かつたのである。

十三年七月二十三日の夜、下谷清水町の共同便所が爆彈で破壊された。同二十八日、青山墓地で爆彈が破裂した。

大正十三年九月一日、大震災一週年當日、労働運動社同人

和田久太郎は、大杉等虐殺當時の戒嚴司令官陸軍大將福田雅太郎が本郷の在郷軍人團の震災記念會に出席するのを途上に邀へてピストルで狙撃したが、福田は脊面に一錢銅貨大の火傷を負ふたのみだつた。第一彈が、空彈であつたからである。和田は直ちに捕へられた。

九月三日夜、本郷本富士警察署に爆彈が投ぜられたが、爆發しなかつた。九月六日、福田雅太郎の代々木の邸へ爆彈の小包が配達された。彼の娘がその紐を解くや轟然爆發して天井を打ち抜き壁を燃やした。九月八日夜、銀座尾張町の電車線路で爆彈が破裂した。

九月十日の夜半、市外平塚村蛇窪に島貞尙と稱して住んでゐた労働運動社同人村木源次郎、古田太次郎が警視廳の三十六名の刑事隊に包圍されて捕はれた。上野、青山、福田邸、銀座の爆彈事件は村木、古田が自ら製造した爆彈の「小手調べ」であつたのだ。

これより先、大正十年の頃、關東の思想團體の有志、中濱哲、古田太次郎、後藤謙太郎等はギロチン社を結盟した。大阪の總聯合創立準備會を機として中濱は下阪し、關西の同志を糾合して専ら秘密運動の資金調達に努めた。震

災によつて大杉等の殺されたことを遺憾としてその復讐を誓つた。大正十二年、十月十四日田中勇之進は甘粕の弟を三重松坂に襲撃して傷を負はせた。（懲役十三年）十一月下旬、運動資金調達のために小坂銀行員を殺害した小西、河合、内田、仲、茂野、上野、小川は捕へられた。が、古田、中濱、倉地は逃れて朝鮮、支那等を廻つてゐたが、その間に村木、和田と連絡して時の至るのを待つた。しかし、中濱哲は十三年四月鐘紡社長武藤山治を襲つて捕はれた。震災一週年當日、和田久太郎等は福田大將を狙撃したが果さなかつたのである。

古田太次郎（二六才） 大正十四年十月十五日死刑

中濱鐵（富岡誓） 大正十五年四月十五日死刑

和田久太郎、川合康左右、小西次郎——無期

内田源太郎、茂野榮吉、小川義夫——十四年

倉地敬司、仲喜一——十二年

伊藤孝一、上野克己——三年

若松刑務所に收監されてゐた中濱鐵等を救ひ出すためにこの刑務所の爆破を計畫したが未遂で捕はれた。山田正一（昭和二年十一月四日獄死）小西武夫（昭和二年十一月七日獄死）茂部治之助（懲役四年）小西松太郎（同四年共に

服役中)

古田、村木、和田の福田狙撃事件に關連して坂谷寛一(一年六月)逸見吉三(一年)八木信一(執行猶豫)新谷與一(五年)

福田狙撃事件の村木源次郎は市ヶ谷刑務所に在つて結核に尿毒症と腎臓病を併發した。危篤のまゝ責付出監したがその翌日、大正十四年一月二十四日午後三時半、同志に護られながら勞働運動社で最後の息を引き取つた。三十七才であつた。

また、先に軍隊宣傳のために巢鴨刑務所に入獄してゐた後藤謙太郎はこの一月二十日獄窓の鐵格子に細紐をかけて縊死した。彼の身元引受人は村木であつた。二月一日兩名の追悼會が小石川の道榮寺で行はれた。

震災後、無政府主義團體はかうして幾多の同志をギロチン獄窓に送つた。

●政治×革命か、社會×革命か

山本地震内閣がその反動軍閥の爪牙をかくして人氣取りの普選をにほはせると、共產黨に指導さるる徒輩は「敵の陣形に應じて味方の陣形を建てなほす」ときである「支配

階級の××精神を鈍らすために與へんとする改良的政策を利用するとも、我々は斷じて墮落せざるを信する」と稱して、投げ與へられた改良的政策に追隨した。

これに對して無政府主義者は常に變らざる態度を以つて、「今は、敵の陣形に應じて味方の戰術を變更する時ではない。敵の陣形を見て更に味方の陣形を強固ならしむべき時である。敵の假借なき彈壓の力に對するに、更に一段の銳鋒を以つて對峙し、戦ひをして一層白熱化せしむべき時である」ことを注意し、共產と自由聯合の新制度を理想するものであることを明かにして「この時に際して我等はいよゝ僕等の態度を明かにし、我等の最後の目的に向つて邁進する」ものであることを宣言した。

ボルシェヴィキによつて無産階級の政治運動——即ち無産階級運動の方向轉換が叫ばれた當時から、無政府主義者は彼等の運動が、勞働者解放運動の前途を誤るものであることを指摘して極力之に反對し來つた。彼等の云ふ勞働者政權獲得とは要するに舊き權力者に新らしき權力者がその席を代へるのみであつて、たとへ其の名目が勞働者獨裁であらうとも、苟も權力機關の存する限り、それは政治×革命であつて、我等の希望する社會×革命でないことを繰返し

た。ボルシェヴィキは幾度か方向轉換をなしたが、無政府主義者の態度は常に不變である。

●全國勞働組合自由聯合會の成立

大阪の總聯合の協議會が不成立になつて以來、各組合は夫れ／＼の主張を以つて内部の充實に努めて來た。強權的、中央集權的合同論を排撃して來た自由聯合派は最も熱心に總聯合の成立を望んでゐた。

以來、振はなかつた關西の地に關西勞働組合自由聯合會が結成されたのは十三年十一月であつた。そして、「中央集權的統一と、政治運動を主張する組合を排撃すべく、自由聯合主義による全國總聯合を組織すべし」と決議した。東京印刷工組合、關東勞働組合聯合會、中國勞働組合聯合會等は夫れ／＼の大會で總聯合促進の決議をしてゐた。十四年九月の關東勞働組合聯合會は全勞働組合の總聯合と云ふ空虚な問題に關せずして、たゞ同一主張組合の全國的聯合への運動に着手した。既成勞働組合の總聯合は望むべきことではあるが、陰謀と攪亂と利用のみに終始するボルシェヴィキ日本勞働組合評議會、組合帝國主義を抱懷し然も改良的な日本勞働總同盟、合理合法的な官業勞働總同盟等々

のあるとき、これは到底望み得ないことである。全國印刷工聯合會の十五年三月第三回大會を機として、關東勞働組合自由聯合會が結成されてから、自由聯合主義による同一主張組合の全國的聯合の運動は急速に進展した。かうして、十五年五月二十四日、全國勞働組合自由聯合會の創立を見るに至つたのである。勞働組合運動が『現實化』し右傾化して行く時、この聯合會の結成は意義あるものであつた。當時加盟團體は關東十四、關西四、中國五、廣島四、別に北海道に單獨組合二。大會は宣言を發表し、次の綱領を示した。夜は記念演說會が開かれ黒色青年聯盟からも多數の應援があつた。

綱領

- 一、我等は、階級闘争を以つて、勞働者小作人解放運動の基調とする。
- 一、我等は、一切の政治運動を排斥し、經濟的行動を主張する。
- 一、我等は、産業別組織に依る自由聯合主義を提唱し、中央集權主義を排撃する。
- 一、我等は、帝國主義的侵略に反對し、勞働者階級の國際的團結を標榜する。

●黒色青年聯盟の結盟

右傾すべきものは益々右傾し無産政黨樹立の運動は具體化しつゝあつた。そうして、無政府主義運動は黒色青年同盟を結盟した。

種々の社會思想家を網羅して嘗ての日本社會主義同盟の様な、そして英國のフェビアン協會を眞似て、日本フェビアン協會ができたのは十三年二月であつた。その中には右川三四郎、新居格、江口渙、岩佐作太郎等の無政府主義的な人達も入つて居た。十四年十二月七日の協會主催の無産政黨批判講演會を完全に無政府主義者が占領して、政治運動のゴマカシを痛撃するや、協會の實際の事務を執つてゐた木村毅、大宅壯一等の政治運動家は狼狽して協會の解散を宣言する滑稽さを演じた。

無政府主義的諸團體は、東京に於てまた地方に於ても協同してよく講演會や演說會を開いてゐた。黒色青年聯盟直前、十四年十二月一日労働農民黨が結黨式を挙げたときも大舉して會場に潜入してその反對の機を振り撒き、數回演壇に突撃し、一時は議長席すらも占領したが官憲のために三十餘名は檢束された。かうして、政治の本質を暴露し

ルシエヰキを排撃し續けて來た無政府主義諸團體は、その相互間の關係を緊接にし、運動をよりよく深める爲めに或る種の組織を持たねばならぬことを痛切に感じてゐた。大正十四年の暮に、始めて各團體の連絡機關である黒色青年聯盟の成立を見るに至つたのである。その機關紙『黒色青年』創刊號(大正十五年四月五日)に發表された構成團體は次の如くである。

労働運動社、自我人社、無軌道社、黒旗社、黒施風社、朔風會、黒流社、黒色運動社、農村運動同盟、野蠻人社、社會生理研究會、解放戰線社、文藝批評社、無差別社、自由労働運動社、江東自由労働者組合、自由労働相互會、關東労働組合聯合會、東京印刷工組合、横濱印刷工組合、新聞労働聯盟、逓友同士會、市電自治會、芝浦労働組合(以上組合有志)

以上の構成團體で見られる様に、主として關東地方の思想團體と、労働組合内にある無政府主義系の人々を網羅した。

黒色青年聯盟が結盟されて大正十五年一月三十一日の夜、その第一回の演說會を芝協同會館で舉げた。官憲の壓

迫は甚だしかつた。四十數名の辯士は熱心にその理想を語り、火の如き鬭争を誓つた。『街頭に出でよ!』の叫びが起つた。『黒色青年』と染めなされた黒旗を翻して彼等は銀座へ奔つた。

「夜の銀座は歡樂の巷である。ブルジョアの巢窟である。民衆の寒く飢えてゐる時も、銀座は温室の如く暖く豐満である。黒旗は疾風の如くに銀座街頭に驅走する。礫は飛ぶ。旗先は硝子窓にぶち當る。この行動を阻止しやうとした尾張町交番の岸巡查は、全治二週間を要する打撲傷を頭部に受け、遂に窓硝子の破壊されたもの二十有餘軒」を出すに至つた(黒色青年創刊號)

檢束されたもの四十餘名に上り、二十二名は市ヶ谷刑務所に送られたが、山崎眞道、松浦良一、匹田治作、熊谷順二、北浦馨、荒木秀雄、秋山龍四郎の七名が求刑された。

この銀座事件のために、黒色青年聯盟を見なして暴力團の如くに考へてゐる者があるだらう。如何にも、壓迫されるもの、搾取されるものが壓迫するもの搾取するものに對しての鬭争は生命を賭しての鬭争であり、徹底的な社會×運動であることは事實である。

黒色青年聯盟は次のスローガンを掲げる。そしてこのた

震災後の無政府主義運動(古川)

めの運動である。

▼労働者の解放は、労働者自身の手によつてなされねばならぬ。

▼我等は自由聯合主義を強調す。

▼政治運動を撲滅せよ。

▼無産政黨運動を排撃せよ。

▼職業的運動屋を驅逐せよ。

▼全暴壓法令案を葬れ。

黒色青年聯盟の運動は資本家階級をおびやかしてゐる。

官憲の壓迫もまた甚だしい。しかし、聯盟はその最初の宣言書において、また機關紙によつて見られるやうに、「思想的根據のない行動は單なる騷擾であり一揆であり暴動であるだけに止まる。」ことを戒め、「大膽なる行動は大膽なる思想的根據あつてこそ始めて意義づけられる。社會改造運動にあつて最も緊要なことは民衆自身がこの信念を有することである」と強調してゐる。また「^{革命}は工場より、鑛山より、農村より、街頭より勃發するものである。今や大膽に思想し、大膽に行動すべきの時である」と力強く云つて居る。

●黒色青年聯盟の活動

黒色青年聯盟は、最初主として關東地方の諸團體で構成された。關西にあつても、ギロチン社事件等によつて勇敢な同志を牢獄へ、ギロチンへ尊い犠牲を拂つてゐたが、關東の黒聯の成立に促されて、黒社、闘ひ社等の既存の思想團體を中心として十五年の始めに、關西黒旗聯盟を組織し、また中部黒色青年聯盟は六月五日岐阜に成立演說會を催し、その第一聲を放つた。昭和二年十一月東北黒色青年聯盟の成立を見た。黒色旗の下に力強い宣傳は續けられ、今やこの黒色旗は全日本に團結されて居る。日本の無政府主義運動はこの黒色青年聯盟の結盟によつて、更に力強い發展を示してゐる。

黒色青年聯盟は現資本主義組織に反抗するとともに解放運動上における強權的共產主義を排撃する。東京に於て、地方に於て彼等の主催する演說會は絶間なく續けられてゐる。貧窮と壓迫の中に機關紙『黒色青年』を發行して主義の宣傳に盡してゐる。創刊以來、發賣禁止を連續的に受けてゐる。また、行爲そのものを示して、民衆の奮起を促してゐる。勞働爭議にも徹底的な應援を送つた。大正十

五年四月の京成電車の爭議に際しては、會社に對する戰闘宣明書と抗議文を突きつけて爭議團の交渉を助けた。これを携へて會社に押しかけた四十余名は三百余名の警官隊に包圍されて大亂闘となつた。捕はれた二十名は各二十五日の拘留に處せられた。同十月、日立製作所の爭議を應援して社長久原の邸を襲撃した二十余名のうち六名は放火罪、騒擾罪で起訴されて、今は獄中にある。或はまた、ボルシエヰキの野心に蹂躪されつゝあつた濱松樂器爭議に憤起した關西黒旗聯盟員は、靜岡縣知事官舎

の様に、黒色青年聯盟は常に勞働者の現實の經濟争闘を應援し、激勵した。そして亦、南洋サイパン島の爭議應援に、世界に法律の

サツコ、ヴァンゼツ事件の釋放運動對支出兵反對運動等に於て、常に勞働組合自由聯合會と相提携して來たのである。

昭和二年春の關東勞働組合自由聯合會大會は、汎太平洋勞働組合會議に代表を派遣して支那漢口に開かれた同會議に出席した。この代表の報告に據つて、この會議が第三インタナショナルの指令の下に、ロシア共產黨の極東政策の野望を充すものであることが知られた。そして黒色青年聯盟はこの會議を國際勞働會議と同様に否認し排撃すべきこと

を提唱した。然るに「決議案中第三及第十六に對しては、

意見の決定を保留し他の條項は、之に現はれたものの中に就いては反對すべき理由なしとて大體之を承認する事と決定。尙全世界のシンデカリズムを採用してゐる勞働團體に對して、汎太平洋勞働會議に對する意見を聴き、併せて參加を勧誘する文を發する事となつた」との八月十三日の關東勞働組合自由聯合會の協議會の態度を知つた黒色聯盟は、協議會が一時保留した事項即ち「世界平和の保持のために勞農ロシアを防衛する」との決議は、大會の宣言にも明かにせられてゐる如く「解放されたロシア勞働者」言葉を換へるならば共產黨との提携を意味するものであるからして、「一般綱領、經濟綱領には別に反對すべき事項を見出さない」と云ふ理由からこの會議を支持することは、過去の我等の経験から深く訓へられてゐるやうに、思想上から云つてもまた實際的のものとしても支持すべきものでないことを述べて、自由聯合會の反省を促がした。やがて自由聯合會も是を認めるに至つて、前回の決定を取消し更めて同會議より脱會することを聲明するに至つたのである。

●農村運動聯盟の結成

震災後の無政府主義運動（古川）

震災前には農村運動同盟があつて「小作人」を發行してゐたが震災によつて一時廢刊になつてゐた。日本の無政府主義運動は都會の勞働者の間に育てられた觀があつた。彼等は常に、勞働組合が妥協的となり、組合萬能主義的となる傾向を警告し、都會の存在そのものは中央集權を必要とするものであることを指摘して、都會の勞働者の運動は資本主義制度、集産制度を否定し、地方分産の自由聯合組織の建設的運動であるべきことを強調して來た。また『黒色青年』は最も之に力を注いだ。大正十五年十月には再び『小作人』が復活して、昭和二年五月に至つて農村運動聯盟を結成するに至つた。農村運動聯盟は常に黒色青年聯盟と歩調を同じくしてゐる。また聯盟は先の『小作人』を繼承して機關紙と農村への潜行運動に盡力してゐる。『小作人』第六號に云ふ。

「かくて自覺した農村がそれからそれへと聯合して行つて互に自他の自由を犯さず有無相通するならば、質朴な農村の美風は更に自由生産、自由消費の經濟的解放によつて強固な秩序ある新社會が現出するのだ。その實現の日まで我等はあらゆる社會の不正と死を賭して闘ふのだ。」その農村運動聯盟が『根本的解決の鍵』とする農村本位

の新社會の建設が、先に云つたロシア革命を本當の社會革命に導かうとした農民の本能的な運動、農民自身の創造的な運動、自主自治な自由コミュニティの平和な組織の建設を意味するものであることが窺はれる。

水平社の運動に就いては、別に詳述されることと思ふから言及しない。たゞ、水平社の内部にも自由聯合主義を標榜し組織された『解放聯盟』が在つて、勇敢に闘ひつゝあることを記すに止める。昭和二年秋の陸軍大演習後の觀兵式の當日、軍隊内の差別待遇の事實を直訴した北原泰作はこの解放聯盟の一員であつた。

無政府主義諸團體は、夫れくの機關紙或はパンフレットを發行してゐるが、これに對する官憲の壓迫は甚だしく、その多くは發行と同時に沒收されてゐる。震災直後第四回の復活をした『勞動運動』は十五年八月まで一時休刊し、昭和二年一月から型を雜誌型に更めて無政府主義運動の理論と實際を紹介し、『黑色青年』『小作人』はそれぞれの運動を根強く續けてゐる。

先に、黑色青年聯盟の一部によつて創められた『反政黨新聞』が、マルクス主義の影響を受けて左翼共產主義的理論を表明するに至つた。黑色青年聯盟はその理論的根據の

曖昧を指摘し、その裏切的行爲を糾弾した。彼等も之を「認識の相違である」と稱して遂に黑色青年聯盟より訣別するに至つた。黑色青年聯盟はこの『反政黨新聞』をボイコットして、關西黒旗聯盟の有志によつて發行されてゐる『關西自由新聞』を積極的に支持して之を『自由新聞』と改め、昭和三年一月より發行することになつた。

▲黑色青年聯盟——東京市麻布區筈町六十五、

▲農村運動聯盟——埼玉縣浦和町常盤町、

▲自由新聞社——大阪市浪速區水崎町四六、

以上で、組合總聯合が決裂してから以後、日本の社會主義運動に相反する二つの傾向が明瞭にされ、強權的共產主義に對して自由聯合主義乃至無政府主義が如何なる運動をなし來つたかを簡単に記した。斷るまでもなく、この記事は簡單であり粗雑である。然もこれは表面に現はれた運動の大略を記したに止まつて、如何なる地に如何なる運動が進展されつゝあるかに就いては無政府主義運動の性質上、記すことが出来ない。

この簡単な記述によつて、無政府主義者が如何なる主義思想によつて運動しつゝあるかに就いては、讀者諸君の推察にまかせる。

——一九二七、一二、四、——